SANDY PITMAN

歓喜のスナップ

頂上を極めて記念写真に収まる登山家たち。(左から)ティム・マッドセン、シャーロット・フォックス、レーネ・ガメルゴール、ロプサン・ジャンムー、ロブ・ホール(撮影はサンディ・ヒル・ピットマン)

取っていたホールは一二日、衛星電話を経由して妻ジャン・アーノルドと二回話をしている。アーノルドは妊娠七カ月。二人にとっての初めての子だった。「僕のことは心配しなくていいよ。ホールは最後の電話でそう言った。

自分も登山家のアーノルドは、エベレストで二日間も遭難して生き延びた例がないことは知っていた。食料も酸素もなくなり、ホールの無線連絡は途絶えた。彼は一日夜死亡したものとみられる。

その夜、同じニュージーランド隊の一員で消息が途絶えていたアンディ・ハリスは、第四キャンプのそばを通っていたらしい。方角を見失い、雪に埋もれてしまったようだ。

次々と死亡が確認されても、救助隊の活動が終わるわけではない。第四キャンプにいるウェザーズと高を入院させる必要があったが、二人とも歩ける状態ではなかった。

そこで救助隊は一二日、ウェスタン・クームを通って下山することにした。岩壁では、ウェザーズのひじにロープを巻いてつり下げた。ウェザーズの手足の指先は凍傷で感覚がなくなっていたからだ。

平坦な道になると、シェルパたちは彼を寝袋に入れて引っ張った。ようやく第一キャンプにたどり着いたのは、一三日の朝だった。だが、ベースキャンプはさらに四〇〇メートル下。途中には深いクレバスや巨大な氷塊が待ち受けている。

歩けないウェザーズと高を下山させるのは不可能だ。ヘリコプターによる救助も、これほどの高地では例がなかった。だが、ネパール陸軍のパイロット、マダン・K・C将校は、地上すれすれのところでヘリを水平にバランスさせ、二人をヘリに乗せることに成功した。

いつかこの日が来ると

高は、ヘリの中でマダンと冗談を飛ばした。死のふちからよみがえったことを考えると、笑いが止まらなかった」という。

死んだホールは、心配するなと妻のアーノルドに言った後、二人で赤ん坊の名前について話し合った。それがホールにとって何ものにも替えがたい慰めになったと、アーノルドは思っている。

五歳と九歳の二人の子供とともに残されたフィッシャーの妻は、「この日が来ることへの覚悟はあった」と語っている。

エベレストで遭難した登山家たちは、自分の意思でこの山に登っている。だから普通の災害の場合とは違い、遺族にも「なぜこんなことに」という苦しみはないのかもしれない。しかし、死のふちから戻った登山家や遺族の冷静さは、いささか不気味なくらいだ。地球上で最も死に近い場所から、彼らは何を見ているのか。

ジェリー・カレラ、ロッキー・マウンテン